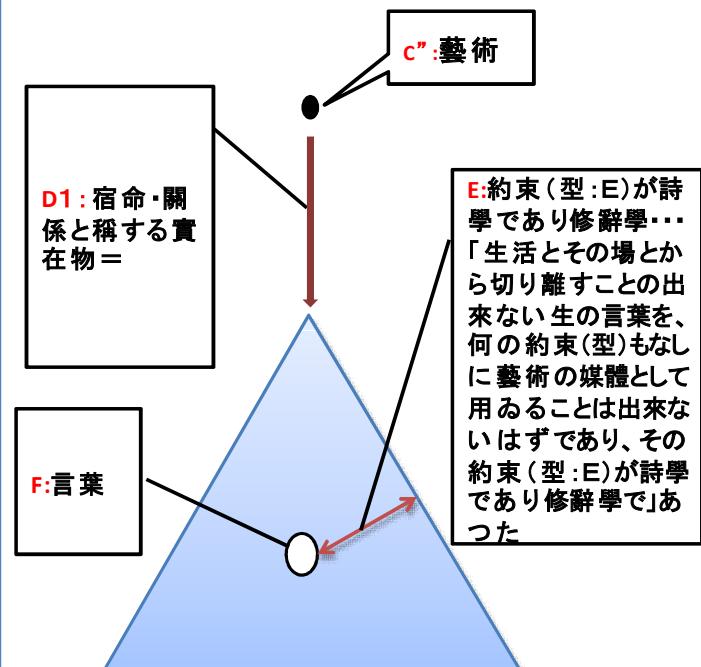


場 (C') から生ずる、「関係 (D1) と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ (問答・對話・獨白:言葉) によって表し得る」。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方 (型・E の形成 = 「型にしたがつた行動」) によって、人間は場との關係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



* 修辭學と絶縁後の、散文作家に「散文の限界」(浪漫主義時代)。⇒

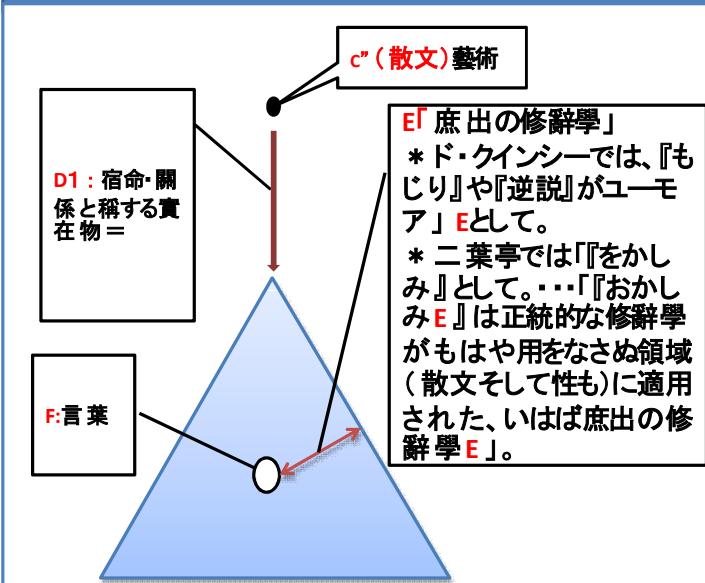
* ⇒ 即ち「詩學や修辭學に頼れぬ」と言ふことは、「散文では歌へぬ」と言ふことを指す。

* 約束 (型:E) が詩學であり修辭學… 藝術を志向する限り散文は、型即ち約束 (E:詩學・修辭學) と絶縁しては、歌うこと (藝術の本質と言ふ事か?) が出来ないと言ふことである。

何故ならば、「生活とその場とか
ら切り離すことの出来ない生の言葉を、何の約束(型)もなしに藝術の媒介として用ゐることは出来ないはずであり、その約束(型:E)が詩學であり修辭學で」あるからだ。

* 「言葉が何ものかを描寫し表現しうるものであるとするならば、その何ものかは現實の特殊な事實ではなく、理想 (C) の普遍的な型 (E) であつて、詩學や修辭學は専らそれを表現するための技法 (即ち E) なのである」

場(C")から生ずる、「関係(D1)と称する実在物は潜在的には一つのせりふ(問答・対話・獨白:言葉)によって表し得る」。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方(型・Eの形成=「型にしたがつた行動」)によつて、人間は場との関係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



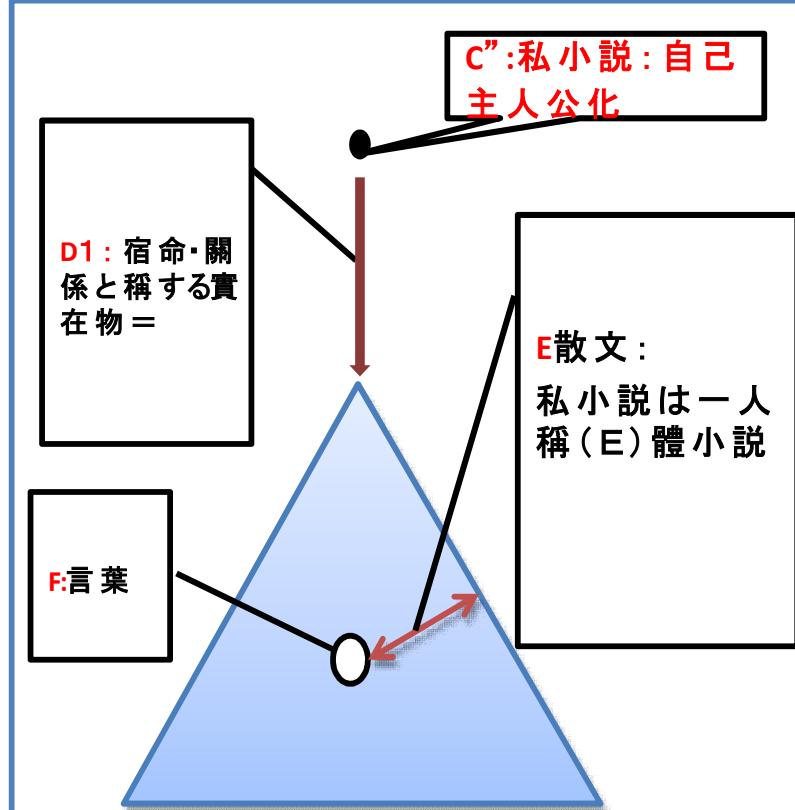
E「庶出の修辭學」…

「『もじり』や『逆説』がユーモアや、「『をかしみ』は正統的な修辭學がもはや用をなさぬ領域(散文そして性も)に適用された、いはば庶出の修辭學(E)」と言ふ事であらう。

何故ならば、「事實は語るべきものではなく、ただ在るもの」(62上)
⇒故に「現實のうちには、修辭學の手の届かぬ領域といふものがある。厳密に言へば、現實とはすべてさういふもの(修辭學の手の届かぬ領域)なのだ。

現實は言葉のうちにはない。言葉は現實を現さない」(62上)⇒故に散文藝術では『をかしみ』(庶出の修辭學: E)で歌ふ以外に手はなかつたと言ふ事であらう。

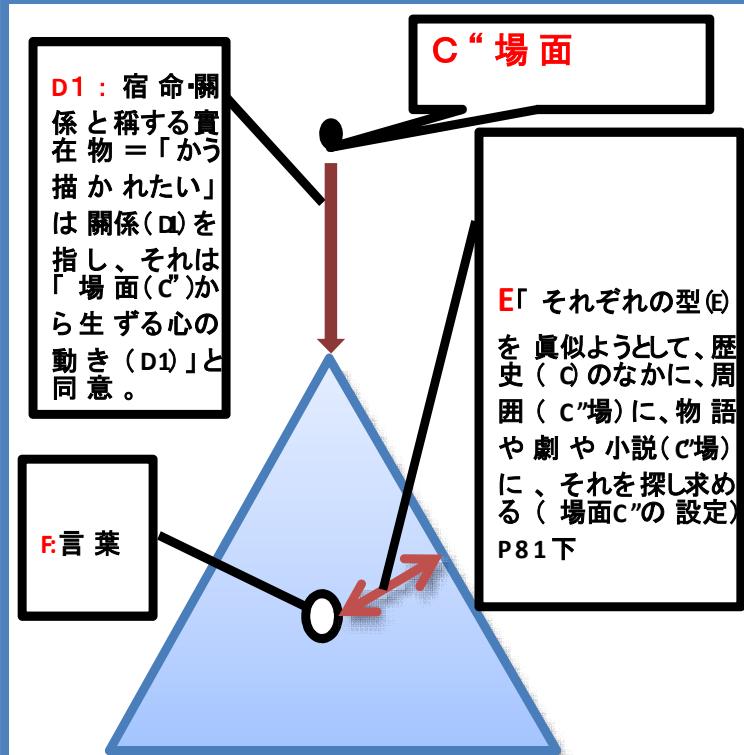
* 以下圖は日本の自然主義文學(私小説)の場合の「E・C”」



* 散文藝術における彼我の差(C”及びEの差異)。即ち以下は、散文における、修辭學缺如に對應する爲の method論と言ふ事か？

	C”	E(型)
西歐近代小説	神の代わりに自己(自己完成)	散文(E)小説
私小説	自己主人公化(自己陶酔)	一人稱(E)體小説
漱石	背後の道徳(C)	文學は遊び(理屈Eによる遊び)

場(C') から生ずる、「関係(D1) と稱する實在物は潜在的には一つのせふ(問答 対話 獨白:言葉) によって表し得る。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方(型 Eの形成=型こじかがつた行動) によって、人間は場の関係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事はある。



- * 「チエーホフは登場人物がそれにかう描かれたいといふ姿勢を知つてゐて、その肖像を彼等が欲するやうに描いた」(P78上)とは何を言はんとしてゐるのであらうか。…「かう描かれたい」は關係(D1)を指し、それは「場面(C') から生ずる心の動き(D1)」と同意なのである。それ故に「かう描かれたい:D1」は、シェイクスピアの自己劇化(D2)の「裏返しをもくろんだ」と言ふ前出文に繋がつていく。
- * 「本人の意識を無視して、物(對象F)としての彼をとらへうると言ふ盲信は、實證科學の影響である。私たちはまだそれから自由になつてゐない。(中略)すべてを物(對象F)として寫しとり、物(對象F)としてしか寫しとれぬといふ實證科學は、ただその延長線上に意識を(物として)發見しただけのことなのである」(P78下)